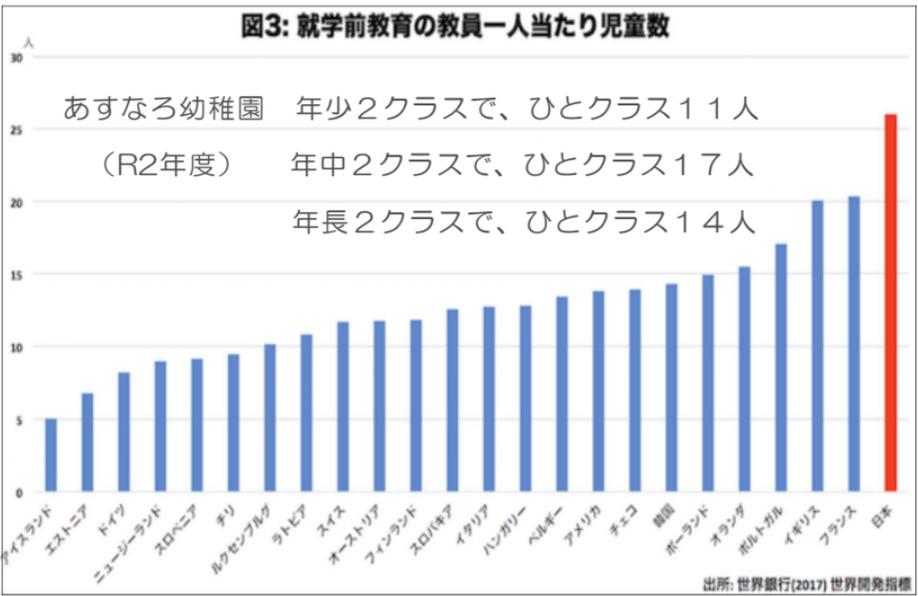


<少人数クラス>

子どもとの“対話”を通して
ひとりひとりの発達の様子を捉え
成長へと導くことが丁寧に行える

幼稚園でのひとクラスあたりの人数は、世界的にはどうなっているのでしょうか？（下のグラフを参照）OECDのひとクラス平均は14名ほどで、1人の担任が着いています。幼児教育先進国と呼ばれている国では、ひとクラス6人に1人の担任がつきます。日本は、1クラス27人の幼児に1人の担任です。クラス補助として担任の他にも保育者をつけているクラスもありますが、クラス運営は担任ひとりで行っているのが実際です。



世界的な少人数クラスの流れは、「保育の質」を上げることが目的です。その裏付けとなったのが、シカゴ大学の経済学者ジェームス・ヘックマン教授の『幼児教育の経済学』です。社会投資として幼児教育に1ドルお金をかけると6.2ドルの経済的利益を生み出し、小・中・高・大への投資よりもはるかに大きな効果があった、と報告されました。その中で「ペリー幼児教育プログラム」が、そのエビデンス(根拠)として紹介されています。その教育プログラムの内容のひとつに <子ども6人を先生ひとりが担当する少人数制> があるのです。

そして、「子どもの将来の社会的成功は、幼児期に、主体性、自制心、意欲等の“非認知能力”が育つ『質の高い保育』を受けられたかどうかにかかっている」と結論づけています。クラスの人数が多いと、担任は手がまわらなくなります。すると、「〇〇しなさい」といった行動指示が多い「管理保育」になるか、ケガやトラブルがないように見守るだけの「放任保育」になりがちです。

大人のみなさんは、学校で体験済みだと思いますが、教師の都合による管理や過干渉から少しでも逃れるのには、クラス人数が多い方が都合がよかったですよね。(笑) でも、子どもの主体性や自主性意欲を大切にする教師のクラスであるのなら、大勢の後ろに紛れてしまうことは、もったいないことです。そうならない、そうさせないためにも、クラス人数を少なくすることは、幼稚園のマネジメントとして大切なことだと考えています。

また「幼児教育の質を上げる」＝「幼稚園での園生活の質を上げる」ということです。そのために必要なことは、子どもと『対話』ができる質の高い保育者が、子どもと園生活を共有することです。そして、クラスの子もたちと、ひとりひとり対話をするのなら、少人数でなければ無理です。日本の幼稚園は、ひとクラス35人まで入れていいことになっていますが、日本の子どもたちも、ずいぶんと多様化しています。それに担任が対応するためにも、少人数クラスは、子どもにとっても、保護者にとっても利益となるはずで

